

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第64輯

池園遺跡Ⅱ

大阪府営助松東第2期住宅(建替)建設に伴う
発掘調査報告書

1991.3

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第64輯

池園遺跡Ⅱ

大阪府営助松東第2期住宅(建替)建設に伴う
発掘調査報告書

1991.3

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



序 文

泉大津市池園遺跡は弥生時代の環濠集落として国の指定史跡になっている池上・曾根遺跡の西北西に位置し、1885年の地図によりますと当時の海岸線からおよそ1 kmほどのところにあります。今は埋まっていますが、遺跡地付近は最近まで大小の溜池があり、その北よりには川も流れていました。察するにこのあたりは古い谷筋ないしは川辺りの地形であったと思われます。

今回の調査は、1988年度に府営住宅の第1期建替に引き続き、第2期工事に先だつものとして実施したものです。調査地点はかつて新池と呼ばれていた池の南よりの地点にあたります。前回の調査では池の埋め立てに用いられた土層から多量の埴輪などが出土して土の供給元に関心が寄せられました。今回の調査では池底の下から弥生時代前期頃の川の跡と川底に溜った土器が見つかりました。この川筋の上流近くにある池上・曾根遺跡や池浦遺跡のムラがあるいはもっと広がっていたのか、それともこの調査地点のすぐ近くに別の弥生時代前期のムラがあったのか、今後この地域の調査に期待したいものです。その意味でも今回の調査成果がこれからの周辺地域の研究の足がかりになれば幸いです。

本調査を実施するにあたって、泉大津市教育委員会、大阪府教育委員会、大阪府建築部住宅建設課、地元自治会など多くの関係者の皆様のご支援とご協力をいただき、深く感謝しております。今後とも当協会の事業に変わらぬご理解とご協力をお願い申し上げます。

平成3年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 仁賀奈祐吉

例 言

1. 本書は泉大津市東助松三丁目に所在する大阪府営助松東住宅第2期（建替）建設工事に伴う池園遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府建築部住宅建設課の委託を受け、大阪府教育委員会の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
3. 調査は大阪府埋蔵文化財協会調査課調整係藤田憲司が担当し、現地調査には泉大津市教育委員会の協力を得て、同教育委員会社会教育課原島麻実があたり、当協会調査課第2班虎間英喜が随時参加した。
4. 現地調査は1990年9月25日に開始し、同年12月18日に終了した。現地調査後引き続き整理作業を行い、1991年3月本書の刊行をもって終了した。
5. 調査方法は、当協会の発掘調査規程にしたがって、国土座標法第VI系による3級基準点をもとに地区割りを設定した。図中の方位は座標北を示し、標高はT.P.で示した。図中、座標および高さの単位はmで標記した。土壌および本文中の土器の色調の同定は小川正忠・竹原秀雄編著「新版標準土色帖第7版」1987年によった。
6. 本書に使用した写真は遺構撮影を調査担当者、遺物撮影を小倉 勝があたった。
7. 本書の遺物は通し番号を与え、図・写真ともに共通する。
8. 本書の執筆編集は原島が担当し、藤田・虎間が適宜協力した。なお執筆にあたっては協会職員の助言を得た。

目 次

巻頭図版

序文

例言

第 I 章 調査に至る経緯と調査の経過	1
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 調査の経過	2
第 II 章 遺跡の環境	3
第 1 節 池園遺跡の位置	3
第 2 節 歴史的環境	4
第 III 章 調査の成果	5
第 1 節 基本層序	5
第 2 節 第 1 遺構面	6
第 1 項 遺構	6
第 2 項 遺物	13
第 3 節 第 2 遺構面	16
第 1 項 遺構	16
第 2 項 遺物	16
第 IV 章 まとめ	21
附 章 池園遺跡の微化石分析 (略報)	24

挿図目次

第1図	調査区位置図	1
第2図	地区割図	2
第3図	位置図、周辺図	3
第4図	調査区南壁土層断面概念図	7～8
第5図	土層断面図	9～10
第6図	第1遺構面 平・断面図	11～12
第7図	池埋土出土遺物1	14
第8図	池埋土出土遺物2	15
第9図	第2遺構面 平・断面図	17～18
第10図	01-OR出土遺物	19
第11図	各分析処理方法	24
第12図	珪藻ダイアグラム1	25
第13図	珪藻ダイアグラム2	26
第14図	火山灰分析結果	27

図版目次

図版1	調査区周辺航空写真
図版2	調査区航空写真
図版3	土層断面
図版4	第1遺構面
図版5	第2遺構面
図版6	出土遺物(1)
図版7	出土遺物(2)
図版8	出土遺物(3)
図版9	出土遺物(4)

第 I 章 調査に至る経緯と調査の経過

第 1 節 調査に至る経緯

池園遺跡は泉大津市東助松三丁目に所在する。かつてこの地は、新池・二枚池・古池・南古池と呼ばれた溜池の集中していたところで、1988年財団法人大阪府埋蔵文化財協会で発掘調査を行っている。この調査は新池の埋立地に建てられていた大阪府営住宅の第 1 期（建替）工事にともなって、大阪府教育委員会の指導のもとに実施したものである。

この時の調査成果はすでに報告済みであるが、調査対象地は新池の西よりの地点、つまり地形的には北西方向に続く谷筋の低い地点に当たっていたこともあって、池の埋め立て時の埋土層に含まれていた遺物の由来に関心が注がれた。

今回の府営住宅第 2 期（建替）工事は、第 1 期工事と同じく1990年度の関西国際空港関連事業として計画され、大阪府教育委員会の指示のもとに同年 9 月より、本協会で発掘調査を実施することになった。今回の調査は工事予定地内の、新池南部の池底の高い地区にあたり、前回の調査で確認し得なかった池底の下層の調査に重点を置くことになった。



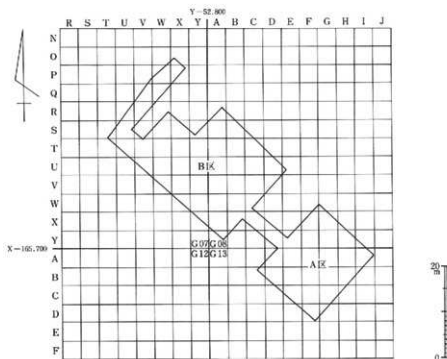
第 1 図 調査区位置図 (1/5,000)

第2節 調査の経過

調査はまず、1955年の府営住宅建設時の盛土（整地層）を重機にて除去した。続いて、旧地目である溜池埋立土の人力掘削を行い、池底を検出してこれを第1遺構面とした。池埋土中からは、奈良時代～現代に至るまでの遺物を検出した。

その後、池底下層の遺構の有無を確認するため、B区内で掘削を行い、遺物を検出することができたので、調査区全域にわたり、人力掘削を行った。その結果、B区にて、弥生土器を伴う自然河川（01-OR）を検出するに至った。自然河川は、B区のみで検出されたため、A・B区間をつなげるトレンチを設定し、河川の方角を確認した。

調査区の地区割は、当協会既刊の報告書にも述べられているが、国土座標をもとに最小4mまでを表示する方法を使用している。それに従うと調査区は、国土座標第VI系、大阪府発行1:2500地域計画図・大E-4-6の内、500mの区画で割ったGにあたり、Gを100mの区画で割った07・08・13に相当する。遺物の取り上げは、それを1辺25等分した4mの区画で行った（第2図）。



第2図 地区割図 (1/800)

第II章 遺跡の環境

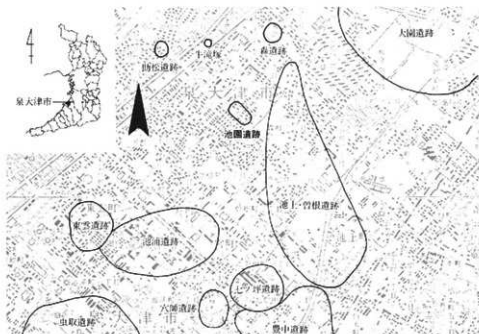
第1節 池園遺跡の位置（第3図、図版1）

池園遺跡の所在する大阪府泉大津市は、大阪府南部西寄りに位置し、いわゆる泉州地域に属する。市の西側は大阪湾に面し、北側は高石市、東側は和泉市、南側は忠岡町と接している。市域には標高20mを越える丘陵部はない。

泉州地域は南北に連なる和泉山脈より派生する丘陵地形が発達している。その丘陵部より北側は平坦で、狭小な沖積地が形成されている。泉大津市はこの沖積地を主とし、低段位丘、海岸砂礫堆及び後背低地上を占めている。

本遺跡は市内北西部に位置する。遺跡の東隣には北西に延びる旧河道がみられる。その東側には、南北に延びる自然堤防が形成されており、これらは現在でも航空写真及び、地形図等から概観できる。

また、本遺跡周辺には、大園遺跡、池上・曾根遺跡、池浦遺跡等が存在する。



第3図 位置図、周辺図 (1/25,000)

第2節 歴史的環境

泉大津市内には縄文時代～中世に至るまで、大小様々な遺跡が20箇所余り確認されている。市域が狭く丘陵部を有しないが、海岸線を除くほぼ全域が、遺跡及び遺物散布地となっている。以下、池園遺跡周辺に位置する各遺跡の概要について、少し述べておく。

現在のところ、市内遺跡において、旧石器時代に属する遺構・遺物の発見はないが、泉大津市、高石市、和泉市の三市にまたがる大園遺跡では、ナイフ型石器が出土している。

縄文時代も明確な遺構は検出されていないが、板原遺跡、豊中遺跡、虫取遺跡では、中期～晩期の土器片が出土している。

弥生時代の遺跡及び遺物散布地は、市内に6ヶ所確認されている。池浦遺跡は前期中段階に形成された集落であるが、中期以降の土器はなく、集落は短時間で消失したものと思われる。虫取遺跡は、人工のV字溝に第Ⅰ様式新段階～第Ⅱ様式の土器が縄文晩期の土器を伴って、大量に放棄されていた。池上・曾根遺跡は、和泉市池上町から泉大津市曾根町にかかる広範囲の遺跡で、池園遺跡の東約100mに位置する。弥生時代全時期を通じて、集落の生成・発展過程がうかがえる。出土品は、土器・石器・木器等、膨大な量に及ぶ。1976年には、史跡指定がなされている。

古墳時代に属する遺跡は、豊中遺跡・七ノ坪遺跡・東雲遺跡等で、平安～鎌倉時代に至る中世の遺跡としては、東雲遺跡があげられる。鎌倉時代以降の建物跡は、1例も確認されていないが、遺物散布地として、虫取遺跡・穴師遺跡等があげられる。

池園遺跡は、1988年度の調査により新たに発見された遺跡である。旧字名が「新池」と称する溜池⁽¹⁾で、付近水田の灌漑に使用されていたと思われる。泉州地域は、溜池の多い所として知られていたが、市街地化の進行とともにその大半が埋め立てられていった。「新池」も1947年頃に埋め立てられ、1955年には、府営住宅建設用地となっている。1988年度の調査で、溜池整地層の中に多くの埴輪が含まれていることが判明しており、今回の調査でも埴輪の検出が予想された。また、「新池」の造池時期及び、造池以前の遺構の有無が想定された。

註(1)「泉大津市の地名」『泉大津市史紀要』第8号 泉大津市教育委員会 1984

(2)「池園遺跡発掘調査報告書」『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第42輯』

(財)大阪府埋蔵文化財協会 1989

第Ⅲ章 調査の成果

第1節 基本層序(第4・5図、図版3)

本調査地点の西方約1kmに位置する弥生時代の池上・曾根遺跡付近は低位段丘の先端部にあたる事が知られており、地質調査所の地質図によれば、本地点ではその低位段丘層が途切れ、沖積層がその表層を覆っている。前回の調査では部分的な観察にとどめざるを得なかったが、少なくとも表土下約3.5mの高さまでは後背湿地的な堆積層があることを認めている。このときは池底の下位の層順について堆積年代を十分に把握することができなかったが、今回の調査で弥生時代前期と考えられる堆積層(第4層)を確認し、前回調査時に把握することのできなかった池底以前の地層の堆積年代の比定についてその一部を補うことができた。

調査区内における層序は、上層より、府宮住宅建設時盛土=整地層(第1層)、溜池埋土(第2層)、溜池建設時の基盤層(第3層)、01-OR埋土および01-ORを形成する砂礫層(第4層)、それ以前の沖積粘土層(第5層)の順に五層に大別される。沖積粘土層の下部には、後述する黒色粘土層があり、その下位に砂層および砂礫層が続いている。

第1層はさらに三層に細分され、第1-a層(1)及び第1-c層(3)は調査区全域に分布するが、第1-b層(2)は調査区東北部の一部にのみ薄く分布する。遺物を全く含まない。全体の層厚は50~60cmである。混ざりものない均質な砂質土壌である。前回調査地点の盛土の一部が拳大の礫や粘土塊を含む砂礫混じり土層であることから、本地点の盛土とは異なった供給地の土壌であると考えられる。前回の調査では、本層中に第1遺構面として住宅建設地以前の畑の耕作土が認められているが、今回の調査では耕作面を確認することができなかった。第1-c層は上面のレベルからみて前回調査の耕作土基盤層にあたり、しいていば池の西部、前回調査地点付近の限られた地区で、耕作が行われていたものと考えられる。

第2層はさらに三層に細分される。第2-a層(4)、第2-b層(5)、第2-c層(35)にあたり、第2-a層は黒色粘土層で植物遺体を多く含む。層厚は約2cmである。一定期間の池底の表層をなす堆積物と考えられる。その下位にある第2-b層、第2-c層は灰色系の粘質シルトなどからなる層で、層厚約5cmあり、第2-c層は調査区東部付近で観察さ

れる。層中に奈良時代から現代までの遺物を含む。

第3層(6~12・36~39)は、その上面が溜池の底(第1遺構面の基盤層)にあたる。弥生時代前期と考えられる01-O R埋土を覆い、新池建設時までに形成された堆積層である。(6)は緑黒色粘質土で草本類の植物遺体を多く含む。第3層上面は調査区東よりでやや低くなる傾向はあるものの、比較的平坦でT.P.+3.9~4.1mを測る。調査区全域に分布し、層厚は約8cmである。二次にわたる調査では(6)層の上面を不整合に覆う平坦な池底しか確認できていない。ただ、(6)がきわめて薄い層であることから、池の維持のために底ざらえられて、本来の層厚を残していないことも考えられる。

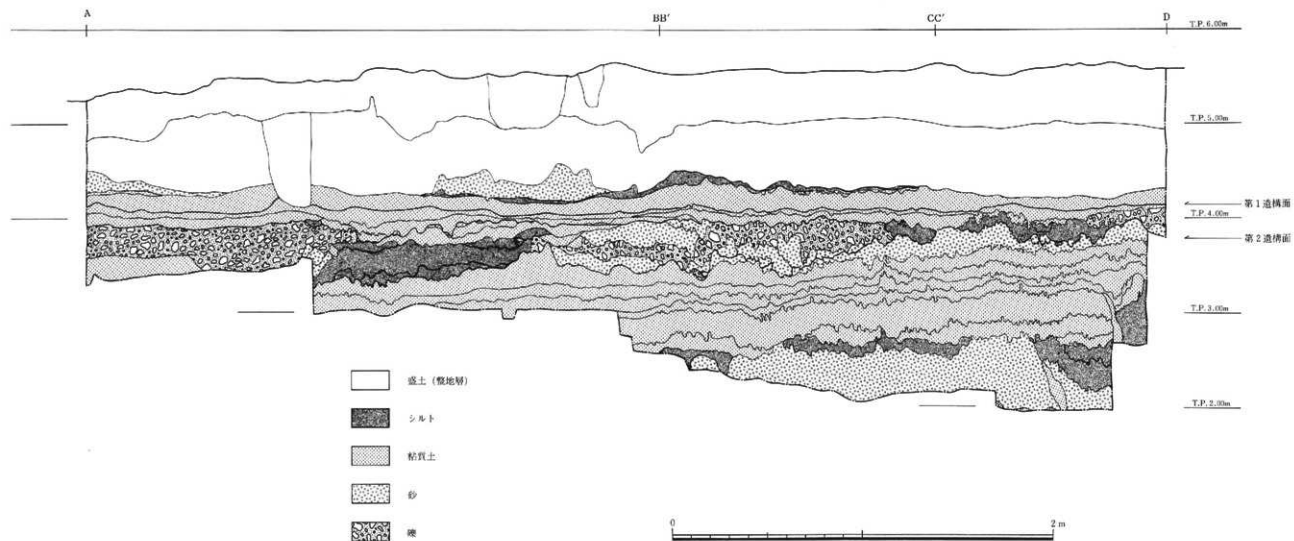
第4層は弥生時代前期後半の遺物を包含する流路埋土(第4-a層-14~31)と流路を形成する砂層および砂礫層(第4-b層-第4図参照)である。砂岩起源のクサリ礫を含む。調査区西半に分布し、東半では細砂層となる。両層を同一層として扱う基準は、本層の砂礫が第5層の主体となるシルト・粘土層の西半上面に限って分布し、拳大の礫を含む流出層と考えられること、その一部に形成された流路内堆積物は、考古遺物を含むものの堆積物の構成内容が流路基底の堆積物と同時異層と判断したためである。第4-a層の基底面を便宜上第2遺構面とする。第2遺構面の上面はT.P.+3.8~3.9mである。その最深部は第5層を切り込んでいる。最大層厚約50cm、平均的な層厚は約20cmを測る。

第5層(32~34・36~45)は第4層以下の堆積層を一括して総称する。調査区の全域にわたって分布し、十層以上に細分される。第4層以下約120cmまでを確認した。その下部を占める灰色及び、青黒色を基調とした粘土層(41~45)はT.P.+3.7~3.0mにかけて、調査区全域に分布している。とくに(44)の青黒色シルト層はアカホヤ火山灰など複数の火山灰を含み、アカガシ亜属などの暖温帯期の花粉化石を含んでいる。

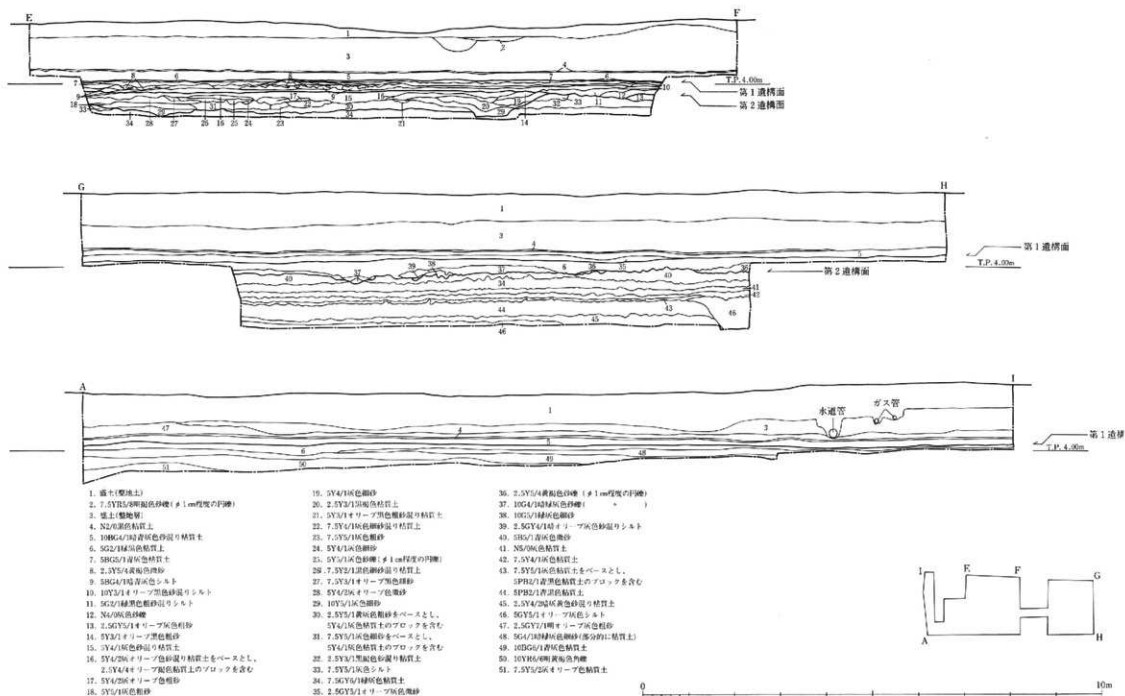
第2節 第1遺構面

第1項 遺構(第6図、図版4)

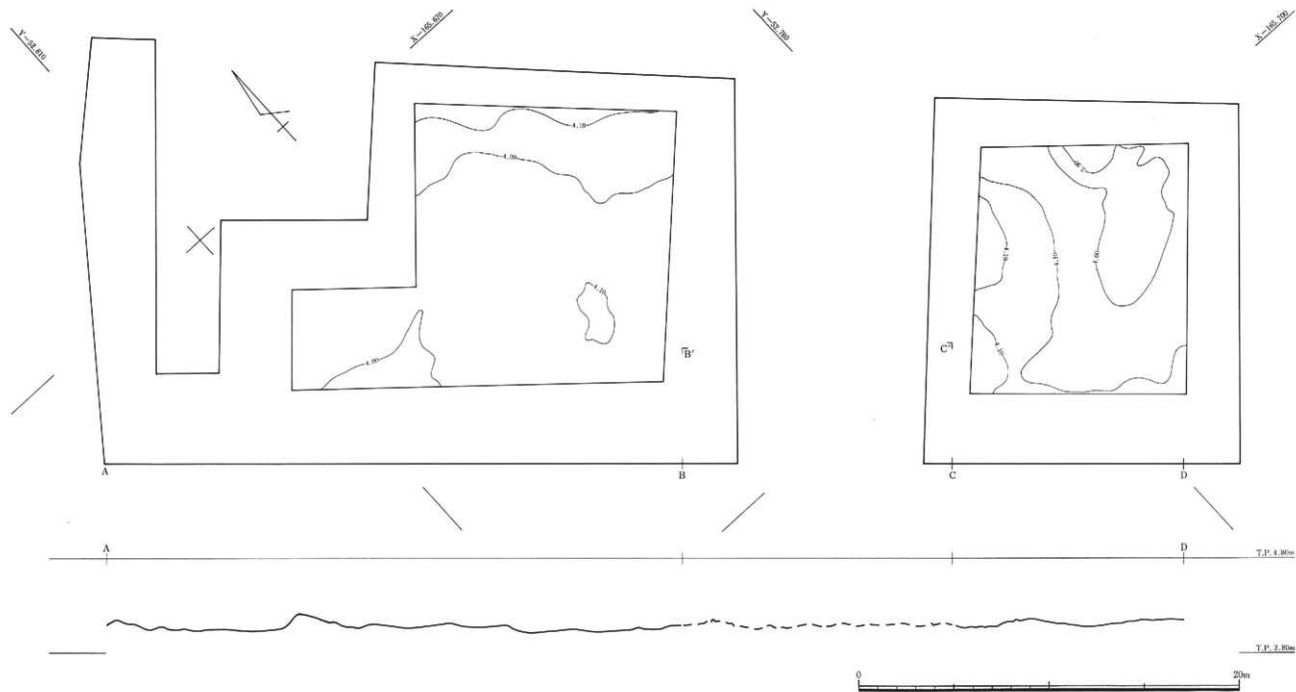
第1遺構面は溜池の底である。調査区全域にわたり、T.P.+4.0m前後で検出されている。池底はほぼ水平で、深い落込みなどは認められなかったが、東の調査区で周辺より約20cm低くなった凹部が認められる。この部分は池の上手側にあたり、あるいは池底の滞道の一つにあたるものかも知れない。調査区南の現遺構は古い空中写真などから判断して新池の堤の裾部にあたる可能性を考えていたが、調査区内では池の堤と思われるものは確



第4図 調査区南壁土層断面概念図 (水平1/200, 垂直1/40)



第5図 土層断面図 (1/80)



第6圖 第1遺構面 平・断面圖 (水平1/200, 垂直1/40)

認できなかった。

1988年度の調査においても、T.P.+3.9m付近で池底が検出されている。これによると調査区南側では平坦で、北半分で大きく落ち込んでいる。しかし、池の中央部ないし下手側となる調査区北端では再び池底が浅くなっている。したがって、幾筋かの溝道が形成されているものの、少なくとも新池の南半分では、比較的水深の浅い皿池であったことがうかがえる。

溜池の底に堆積した埋土中から、奈良時代から現代にいたる遺物が発見されている。このことは、溜池の埋立が1947年頃に行われたという事と矛盾しない。1988年度の調査では埋立の整地層より、多くの埴輪が出土しているが、今回調査地点の整地土層には1点も含まれていない。

第2項 遺物（第7・8図、図版6～8）

遺物はコンテナに4箱出土した。内容は中世～現代の陶磁器が大多数を占める。奈良～古墳時代のものも若干みられるが、遺存状態は悪い。なお、図示した遺物は各調査区で分けず一括して池埋土出土とした。図示した以外のものにサヌカイト剝片2点がある。

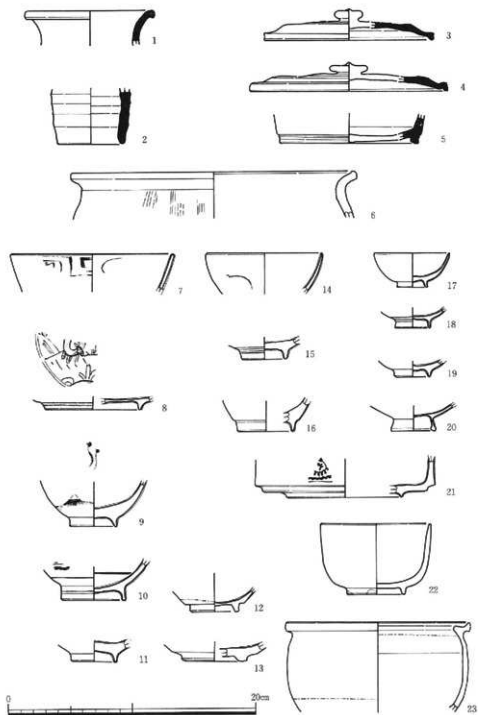
1～5は須恵器である。1は壺で、外側に折り曲げた口縁部をもつ。2はいわゆる釣り鐘形の蝸壺で、高さは10cm前後になると思われる。3・4は杯蓋で、天井部分にヘラ削りがみられる。天井部分はほぼ平らで、口縁部にむかって、ゆるやかなカーブを描く。いずれも宝珠つまみが付く。器高は2cm前後であろう。5は高台を有する坏身で、高台はほぼ垂直に付されている。

6は土師器の甕である。ゆるやかに外反する口頸部をもち、口縁部は上方向につまみあげる。外面は縦方向のハケが施されている。摩滅が激しい。1・2は奈良時代、3～6は古墳時代に属する。

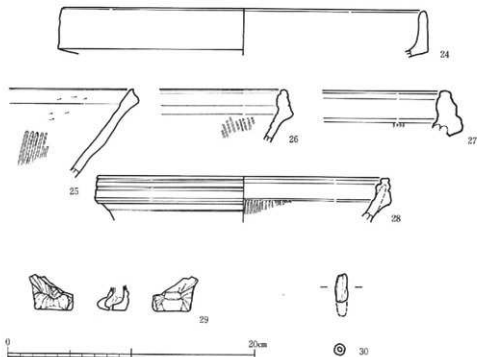
7・8は中国製の磁器である。7は竜泉窯系の碗で、外面に雷文帯がみられる。15世紀前半のものである。8は青花皿で、内面に鹿らしき動物と草木が描かれている。16世紀後半のものである。

9～11は波佐見系の碗である。9は染め付け碗で、内面に鳥状の文様がみられる。10は広東碗で、19世紀のものと思われる。11は白磁碗で、内面に蛇の目の撫き取りがみられる。18世紀のものと思われる。

12は肥前系の白磁碗である。腰部外面と高台が露胎で、糸切り底を有する。13は唐津系



第7圖 池埋土出土遺物1 (1/3)



第8図 池埋土出土遺物2 (1/3)

の皿で、内面に砂目跡を有する。17世紀中頃のものである。

14～19は染め付けの碗である。15は内面に蛇の目の掻き取りがみられる。16は内面が無釉となっている。15～19はいずれも、底径3～5 cmを測る。20はやや外方向にふんばった高台を付す。杯と思われる。21は底径9 cmを測る。外面に、蛸足唐草の文様がみられる。

22は肥前系の京焼碗である。高台の一部に釉切れがみられる。完形品ではあるが、全体に摩滅が激しい。18世紀のものである。23は信楽系の行平である。胴部下端外面と、口縁内面の一部に釉切れがみられる。19世紀のものである。

24は焙烙で、口縁部外面に煤が付着する。底部外面には砂が付着する。口径は30 cmを測る。18世紀のものである。25は丹波播鉢である。薄手で端面は外傾し、播り目はやや粗い。内面に横方向の板ナデが見られる。17世紀中頃～後半のものと思われる。26～28は堺播鉢で、18世紀のものであろう。

29は伊万里焼である。頭部が欠損しているが、人物を型どったものであろう。合わせ型によるもので、中空となっている。底部に小孔を穿つ。玩具か供物と思われる。18世紀のものである。

30は土師質の土鍾である。最大径は1 cm、孔径は約0.3 cmを測る。

第3節 第2遺構面

第1項 遺構（第9図、図版5）

第2遺構面は01-ORの基底面である。01-ORはB区東端を南北に横切る形で検出された。B区内の検出全長は約6mを測る。

調査区外に延びるため、A・B区間にトレンチを設定したところ、トレンチの南壁断面に遺構面が確認された。検出範囲がわずかなため全容は定かでないが、B区内での河川の方は調査区の主軸にほぼ平行して流れている。しかし、トレンチで確認された遺構面より推定すると、主軸よりわずかに東よりにゆるやかなカーブを描いていると思われる。また、A区内で遺構面が確認できないことから、トレンチ以南では西寄りに蛇行していたとも考えられる。幅はB区北端で約0.9mを測り、南端で西側に膨らみを持ち、約2.5mを測る。トレンチ南壁では約0.3mを測ることから、南へ行くにしたがってやや広がりを持っていたと思われる。肩部はT.P.+3.4m付近で検出され、最深部はT.P.+3.2mを測る。

01-OR埋土からは弥生土器が出土している。出土遺物から、この流路は弥生時代前期には存在していたものと考えられる。

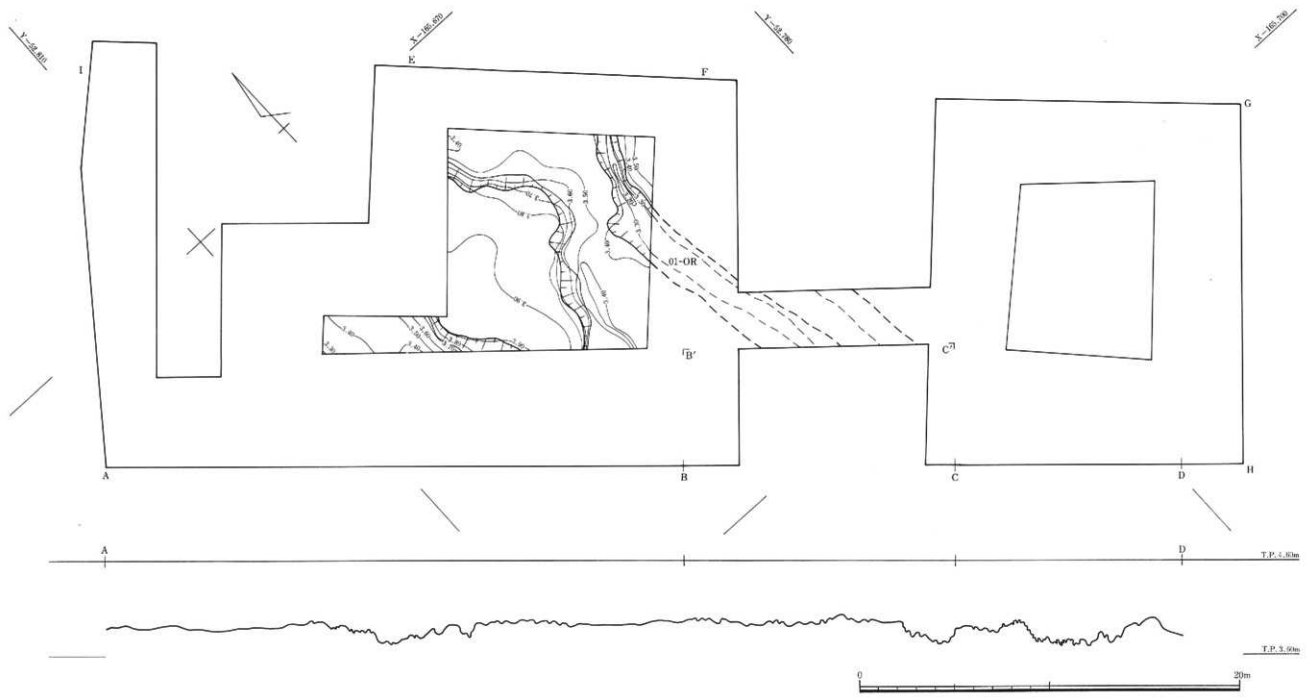
B区は調査区中央付近がT.P.+3.9mと高く、東西に向かって低くなっている。西端部分はゆるやかな傾斜がみられ、01-ORにつながるものかと思われたが、調査区外に延びるため確認することができなかった。遺物は検出されなかった。

第2項 遺物（第10図、図版6・9）

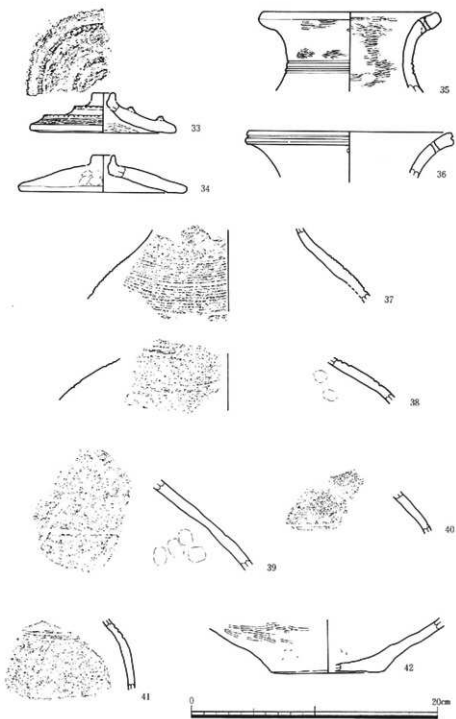
出土した弥生土器は20点余りを数える。内容は広口壺・壺形土器の蓋等で、広口壺の頸部から体部と思われる破片が8割近くを占める。壺の破片が1点見られるが、図示し得なかった。完形品はなく、すべて01-OR埋土から検出した。やや古い様相の見られるもの(39)があるものの、I様式新段階に属すると思われる。

33・34は壺の蓋である。33は笠型を呈しており、中凹み環口状のつまみが付くものと思われる。外面に同心円状に2条の貼り付け突帯を巡らせ、突帯にはキザミを施す。内外面に横方向のヘラ磨きがみられる。蓋径は推定10.0cmを測る。34も環口状のつまみが付くと思われる。無文で外面に指押さえがみられる。内外面に黒斑がみられる。蓋径は推定13.2cmを測る。

35・36は広口壺である。35はゆるやかに外反する頸部をもち、口縁部は外上方に開く。



第9圖 第2遺構面 平・断面圖 (水平1/200, 垂直1/40)



第10圖 01-OR出土遺物 (1/3)

端部は面をなし、口径13.5cmを測る。頸部には3条の沈線を施し、口縁部に紐孔を1孔穿つ。内面にやや粗いヘラ磨き、外面に細かいヘラ磨きを施す。36は口縁端面に1条の沈線を施す。内外面はヘラ磨きの後、ナデ消しによる調整がみられる。口縁部に紐孔を1孔穿つが、破片のため2孔一対の可能性もある。口径は約16cmを測る。色調は内外面とも黒色を呈し、わずかではあるが口唇部に朱い彩色がみられる。胎土中に白色の雲母を多く含む。

37~41は壺型土器の破片である。いずれも外面に沈線を施す。37は細いヘラ描きの8条及び9条の下端に太い1条の沈線を施す、いわゆる付加条をもつヘラ描き沈線文がみられる。頸部付近にはヘラ磨きを施し、外面に黒斑がみられる。38は張りの強い胴部を持つ。肩部に3条以上の沈線を施し、やや間隔をあけて2条の沈線を施す。39は胴部上半の破片であるが、現存部下方に浅く幅広の沈線を1条施し、段成形の痕跡的な要素がうかがえる。内面は指押さえて調整している。今回出土土器の中では最も古い様相を示している。40は肩部に1条以上、41も同じ部位に3条以上の沈線をそれぞれ施す。

42は壺型土器の底部である。やや上げ底を呈し、体部外面に横方向の粗いヘラ磨きがみられる。内面及び外面は右斜め上方向の板状のナデがみられるが、単位は不明である。胎土中に2.0mm程度の白色粒を多く含む。

第Ⅳ章 ま と め

今回の池園遺跡発掘調査では旧溜池の造池時期を確定するには至らなかったが、造池以前の時期のわかる自然河川を検出したことは大きな成果といえよう。1988年度の調査結果をふまえながら、この地区の推移を概観することにする。

一、池の埋め立て整地層について

池園遺跡は、旧字名が「新池」という溜池であったことは、既に触れた通りである。このような溜池は、泉州地方にはかつて多く見られたが、宅地化の波と共に次々と埋め立てられている。泉大津市内においてもかつて20数箇所を数えた溜池も、現在では二箇所を残すのみとなった。「新池」の埋め立ては1947年頃に行われたようで、1955年には大阪府が府営住宅建設用地として買収している。

前回調査では、「新池」埋め立て層から多量の埴輪が出土している。しかし、今回の調査では溜池埋め立て土及び府営住宅建設用整地層からは全く埴輪は検出されていない。埴輪を含んでいた土壌は季大の礫や粘土塊を含む不均質な砂礫土で、段丘構成層に由来するともくされるものであった。前回の調査ではこの土壌の供給元として伝聞考証も含め、信太山丘陵がその有力候補地として指摘されている。

今調査地の埋め立て及び整地層は、層中に考古遺物や礫・粘土塊等を全く含まない、均質な砂からなっている。「新池」の埋め立ての土が一箇所からのものと限定する必要はなく、多角的に供給元を考えれば、今回の地点で埴輪等の考古遺物が含まれないことも理解できる。

二、池の築造時期について

今回の調査区は1988年度の調査区同様「新池」内に位置する。二次の調査では平坦な池底の確認にとどまり、池の肩部あるいは堤に当たる部分を確認することができなかった。このため、池底の基盤となる第3層上部の(6)層について、その層厚が本来のものであるのかどうか判然としない。「新池」の様相はその南半分に限って述べると、比較的浅い皿池で、幾度となく池ざらいが行われていたものと思われる。

この地区の池については「和銅二己酉(709年)」と記す文献もあるといわれている。ま

た、1680（延宝8）年の記録には「新池」の名が出てくると享保年間の「二枚池」に関する争議の文書⁽¹⁾などから、この地区の池について近世まではその起源を遡ることができる。また、消極的な根拠ではあるが、溜池埋土中の遺物の多くが16～18世紀のものであること、1540年頃（天文年間）に北側の自然堤防を削って池堤を築いたという伝承があること等も、16世紀半ば頃に溜池として存在していたのではないかとと思われる。しかし、堤部分の調査を実施していない現在、池の起源については今回も判断を保留しておきたい。

三、01-O-Rの形成とその後

調査区中央部で検出された01-O-Rを覆う第3層の堆積年代は弥生時代前期以降、おそらくは近世までの間に形成されたものと思われる、この地区全体としては、海岸部縁辺に広がる後背湿地の様相が、新池を築造するときまで長期間続いていたと思われる。

泉州地域は海岸砂礫堆の形成時期が古いため、海岸線の変化がさほど激しくない⁽²⁾。そのため居住空間の広さは、過去2000年にわたり大差なかったと思われる。縄文時代の遺跡は泉大津市内では確認されていないが、和泉市の伯太遺跡、池上遺跡等があげられる。伯太遺跡は信太山丘陵に近く（標高15～16m）、池上遺跡は微高地の中央部から裾部へ移行するところに立地する（標高9～10m）。続いて、弥生時代の遺跡は標高7～12mにわたり広く分布する。遺物散布地をも加えると砂礫堆もその範囲に含まれる。つまり弥生時代には、この地域はほぼ全面的に居住空間と生活を営む場となっていたと思われる。その理由として気候や地形条件に加え、水資源の点で比較的恵まれていたことがあげられよう。

今回の調査では弥生前期の土器を伴う01-O-Rが検出された。池園遺跡のすぐ東隣には、中期の大環濠を巡らせた池上・曾根遺跡が存在する。また、やや距離はあるが、池浦遺跡では市内最古の弥生時代のムラが確認されている。

現在、泉大津市内では弥生時代の自然河川は確認されていない。しかし、豊中遺跡では国道26号線付近で、ある一定の幅をもって礫層がみられ、平安時代の井戸⁽³⁾も検出されている。また和泉市池上町では、弥生時代I様式から存在すると思われる3本の溝が、すべて南北方向を向いて検出されている⁽⁴⁾。池園遺跡東隣の旧河道は地表に微高地をなし、現在でもかなり明確にその形を残している。01-O-Rはこの旧河道の分流であった可能性が高い。01-O-Rの埋没時期は明らかではないが、01-O-R以外に溜池造池以前の遺構が確認できないことから、旧河道埋没後も細流をとどめていたのではないだろうか。

これらのことより自然地形として、南北方向に水の流れやすい地形があったものと思わ

れる。「新池」もこういった従来からの水脈を利用した溜池であったことがうかがえる。

流路内に含まれる弥生土器には非常に遺存状態の悪いものも含まれるが、磨耗度の少ないものも少なからずあり、全体として長い距離を流されてきたものとは思われない。近傍の遺跡から押し流されてきたものであろう。池上・曾根遺跡の集落がより広がっていて、その縁辺部から流れてきたものか、あるいは別の前期の集落が新池付近にあったのか、今後の周辺地区での調査成果に期待したい。

四、01-O R以前

第III章で記したように、弥生時代前期以前の地層（第5層）については一約1.2mまでを確認したに過ぎない。調査範囲内では確実な段丘構成層は認められなかったものの、最下部のT.P.+2.7m付近でクサリ礫を含む砂礫層が検出されている。これが低位の段丘構成層にあたるのかどうか明らかでない。この礫層の上位にはT.P.+3.0m付近に、層厚約30cmの青黒色シルト層（44）が堆積している。このシルト層（44）は花粉分析の成果を援用すると、前回調査の第11層もしくは、第10層と第11層の間に挟まれるべき層に対比されると思われる。（44）の層には横大路火山灰と、少量ながらガラスの屈折率の低い別種の火山灰が含まれ、花粉分析の結果から暖温帯期の堆積、すなわち縄文海進期の堆積層ともくされている。この層および前回調査の第11層の上部を覆う粘土層からは汽水産の珪藻化石が検出されており、地層の堆積環境が入海もしくは河口湖的な状態にあったと考えられる。この第5層の形成を中心とした池園遺跡周辺の古環境と考古学的な意義については、さらに詳細な花粉化石等の分析成果をまって再論する機会を持ちたいと思う。

註(1)「泉大津市史」第三巻 泉大津市 1986

(2)「大園遺跡発掘調査概要」豊中・古池遺跡調査会 1979

(3) 坂口昌男氏の御教示による

(4)「豊中遺跡発掘調査概要Ⅲ」泉大津市教育委員会 1979

(5)「池上遺跡発掘調査概要Ⅲ」大阪府教育委員会 1974

附章 池園遺跡の微化石分析（略報）

川崎地質院

はじめに

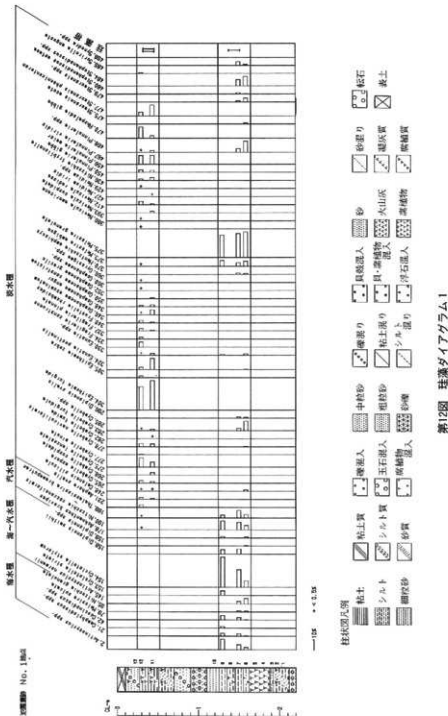
川崎地質院では財団法人大阪府埋蔵文化財協会の依頼を受けて、池園遺跡の調査区内の2ヶ所（合計20試料）で試料採取を行い、古環境復元を目的とした花粉・珪藻・火山灰の各分析を行っているところである。今回は速報として、No.1地点の数試料の分析結果の一部について報告する。試料を採取した断面の模式柱状図は図12の珪藻ダイアグラムに示すとおりである。今回の分析試料は全て、川崎地質院が採取した。

処理方法

それぞれの分析処理方法については図11に示す。珪藻分析処理では、1ミクロン振動マイクロフィルターを使用することによって、粒径処理を確実にするとともに、処理過程の再現性を高めている。

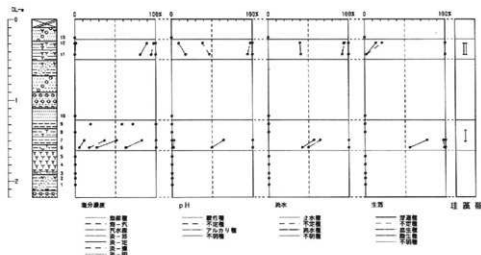


第11図 各分析処理方法



- 柱状図凡例
- | | | | | | | | | |
|-----|------|------|-----|-------|--------|-----|-----|----|
| 粘土 | 粘土質 | 砂泥入 | 中粒砂 | 砂泥り | 鉄泥混入 | 砂 | 砂泥り | 板石 |
| シルト | シルト質 | 砂泥入 | 粗粒砂 | 粘土泥り | 貝・礫物混入 | 火山灰 | 凝灰質 | 表土 |
| 細砂 | 砂質 | 高砂混入 | 砂礫 | シルト泥り | 浮石混入 | 礫物 | 礫質 | |

第12図 柱状図ダイヤグラム I



第13図 珪藻ダイアグラム 2

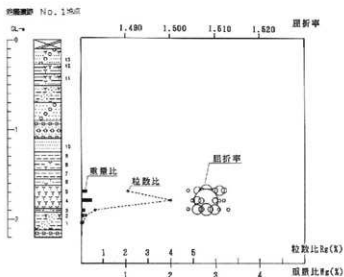
分析結果

(1)珪藻分析 (図12・13)

珪藻ダイアグラムは、検出された珪藻化石の総数を基数として各々の種類について百分率で表し、珪藻総合ダイアグラムは各要素について百分率で表した。また、試料No.1～5・8・10・13では珪藻化石が検出されなかった。試料No.6・7・9では海水域から汽水域に生息する種が、上位に向い増加する傾向でおよそ30～70%の割合で検出される。これに対して試料No.11・12では海水域から汽水域に生息する種はほとんど検出されなかった。

(2)火山灰分析結果 (図14)

図14に火山ガラスの重量比、粒数比、屈折率の測定状況を表した。試料No.1～5について火山灰分析を実施した結果、試料No.1・2には火山ガラスがほとんど含まれていなかった。このため、試料No.3～5について屈折率の測定をおこなった。円の中心が屈折率の測定値を表し、円の大きさが同一の屈折率の測定頻度の多さを表している。屈折率は三試料共に1.504～1.510の値を示すが、特に1.508～1.510の高い値を示すものが多い。



第14図 火山灰分析結果

考察

(1) 珪藻分帯

珪藻化石組成の変化から以下のように分帯した。

I帯 (試料No. 6・7・9) 海水域から汽水域に生息する種が30～70%の割合で検出される。淡水種では、浮遊性の*Melosira*属が30%程度の出現率を示す。

II帯 (試料No. 11・12) 淡水種が100%近い出現率を示し、海水域から汽水域に生息する種はほとんど検出されない。

(2) 火山ガラスの対比と堆積時代の推定

今回分析した全ての試料から火山ガラスが検出された。しかし、その含有率(粒数比、重量比)が低いことから、火山灰の降灰層率とは考えにくく、二次堆積による濃縮層率であると考えられる。これらの火山ガラスを完新世の火山灰に由来すると考えた場合、火山ガラスの屈折率が1.508～1.510にあるものは、横大路(アカホヤ)火山灰に対比される可能性が高い。また、火山ガラスの屈折率は1.504～1.506にも分布している。しかし、この範囲に火山ガラスの屈折率を持つ火山灰はいくつか存在する(吉川ほか, 1986)ことから、これらの火山ガラスの由来を特定することは困難である。

以上のことから今回の分析試料の内、試料No. 3より上位の試料は横大路(アカホヤ)火

山灰の降下時期である、およそ6000y. B. P.以降に堆積したと考えられる。また含まれる考古遺物より、試料No.10~11の間の砂礫層が弥生時代前期の堆積と考えられ、試料No.11~13はそれ以後の堆積物であると考えられている。

(3) 植生と堆積環境

試料No.3~10の花粉分析を予察的に行った。アカガシ亜属が卓越し、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属などの針葉樹を伴う。またブナ属も検出される。草本花粉ではイネ科(40 μ 未満)、ヨモギ属、キク亜科が多く、サジオモダカ属や、ガマ属もわずかに含まれる。

花粉化石の予察結果を加え、縄文時代(中期以降-No.3より上)の古環境推定を行う。珪藻分析の結果から、海水域から汽水域に生息する種と、淡水・浮遊性の*Melosira*属が高い出現率を示すことから、遺跡周辺は湾内から河口域であったと推定される。このことと、この層準の標高から、縄文海進最盛期の高海水準が連続していた可能性が考えられる。水辺にはサジオモダカ属やガマ属、イネ科の、自然堤防などにはヨモギ属や他のキク亜科の生育が推定される。周辺の低地から山麓、山腹にはアカガシ亜属を要素とする照葉樹林が、山腹にはこの他モミ属、ツガ属、コウヤマキ属を要素とする中間温帯林が分布していたと推定される。また山頂部にはブナ属を要素とする冷温帯林が分布していたと推定できる。

まとめ

池園遺跡において現在までに行った分析から以下のことが明らかになった。

- (1) 珪藻帯としてI・II帯を設定した。
- (2) 火山ガラスの検出層準は、二次堆積による火山ガラスの濃縮層であると考えられる。また、火山ガラスの由来の一つに横大路(アカホヤ)火山灰が推定される。
- (3) 縄文時代(中期以降)に、この地点は内湾に注ぐ河口域であったと考えられ、縄文海進にともなう高海水準期での堆積が認められた。また、この時期の植生が明らかになった。

引用文献

吉川周作・那須孝徳・樽野博幸・古谷正和(1986)

「近畿地方中部に分布する後期更新世~完新世の火山灰層について」『地球科学 40, 18~38P』

版 圖

図版一 調査区周辺航空写真



(1989年撮影)

図版二 調査区航空写真





基本层序



01-OR断面



A区 (東から)



B区 (西から)



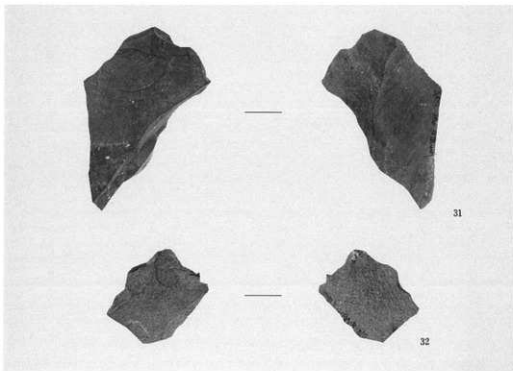
A区 (西から)



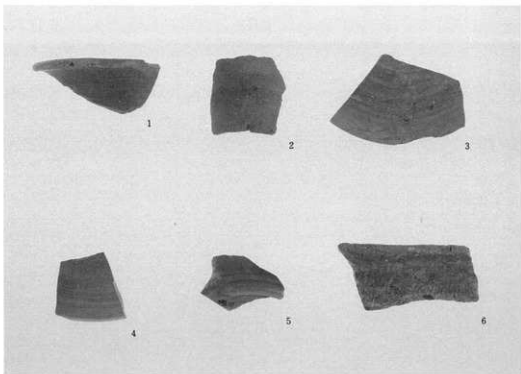
B区 (東から)



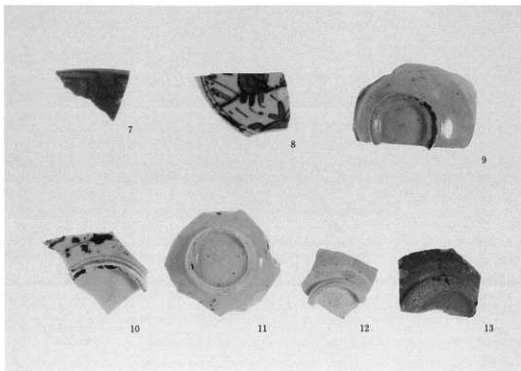
池埋土・01-OR出土遺物



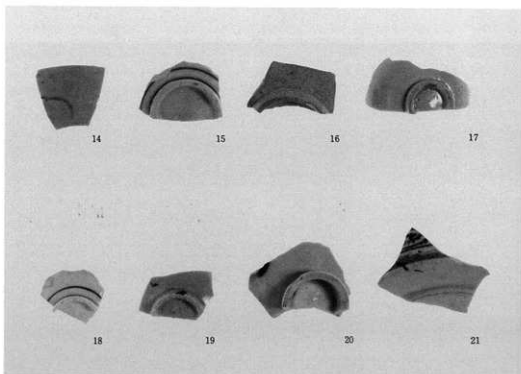
池埋土出土ササカイト剥片



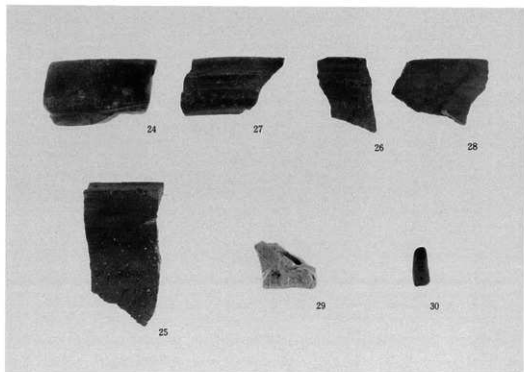
池埋土出土遺物



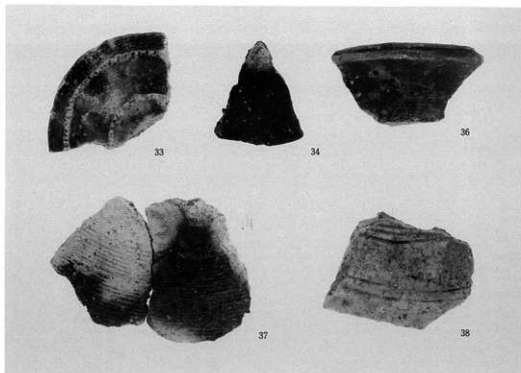
池埋土出土遺物



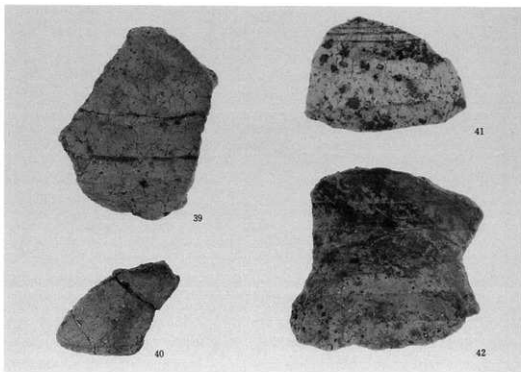
池埋土出土遺物



池埋土出土遺物



01-O R 出土遺物



01-O R 出土遺物

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第64輯

池 園 遺 跡 II

大阪府宮助松東第2期住宅(立替)建設に伴う
発掘調査報告書

1991年3月31日

編集・発行 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
大阪府中央区谷町2丁目2番29号 大手前ウサミビル

印刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

